

祈りの夏 鎮魂へ思い込め

東北被災地で送り盆

送り盆の16日、東日本大震災で壊滅的な打撃を受けた東北地方の被災地では、遺族らが鎮魂の思いを込め、祈りをささげた。大震災から5カ月が経過したが、再生に向け歩み始める地区、癒えぬ傷の重さに復興への道筋が見えない自治体など、表情はさまざまだ。

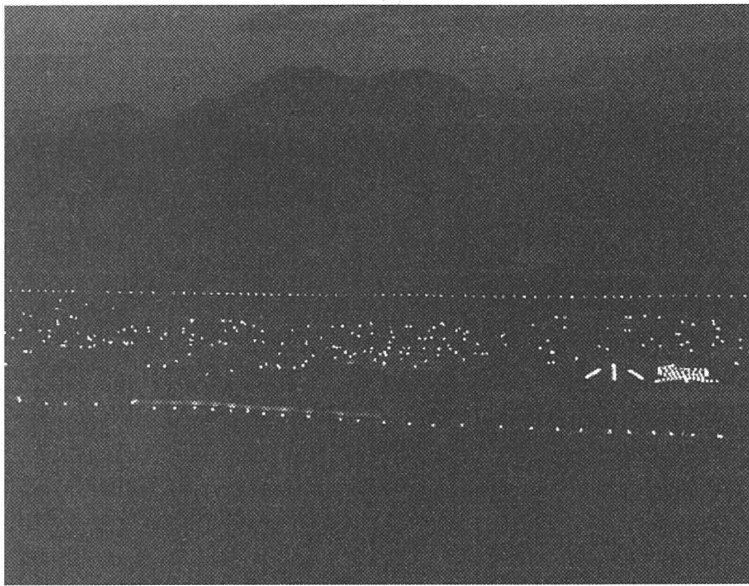
気仙沼市 小泉地区

1000の灯瞬き
まち再生誓う

6割の家屋が津波で破壊された気仙沼市小泉地区。かつて団らん跡に1000の灯(ともしび)が

瞬き、住民は鎮魂の思いを込めながら、まち再生への誓いを新たにしている。今回の送り盆は、住民有志で組織する「小泉地区集団移転協議会」が主催した。同地区の防災集団移転事業実現に向け、北大大学院工学研究院の被災地に住民有志の手で送り火がともされた

森傑教授をコミュニティ・アーキテクトに迎え、住民主導による移転計画作成作業を進めている。



この日は、送り火を見下ろす高台に同地区の住民約300人が集い、読経が流れる中、静かに祈りをささげた。送り火と合わせて催された夏祭りでは、笑顔あふれる子どもを傍らに、震災以降、初めての集いに、住民同士が絆(きずな)を確かめ合った。

大槌町

「重い現実」に癒えぬ傷跡

死者・行方不明者が住民の約1割の1450人に達し、中心部が壊滅した大槌町。中心部には、焼け焦げた鉄骨が点在する。町長が死亡し、廃墟となつていく役場庁舎にかかる時計は、津波が襲つた時刻を指したままだ。

まちを見下ろす高台の



被災者の悲しみは5カ月を経ても薄れることはない

斜面の下にある墓石は、その多くが津波でなぎ倒されている。遠くで読経が流れる。倒れた墓石に仏花を添え、祈りをささげる風景からは、5カ月という時が経過しても癒やされることのない傷の深さが伝わってくる。(文 矢部育夫記者、写真 良知貢一記者)